

「日本の大学院の現状と改革への提言」

令和4年6月吉日
東京福祉大学
総長 学長
教育学博士 中島 恒雄

提言論文

「はじめに」

近年、中国・韓国・台湾といったアジア各国の発展は目覚ましく、バブル期には世界第二位の経済大国で豊かさを謳歌し、経済成長率、平均所得や半導体の製造など、かつては世界を牽引してきた我が日本国ですが、昨今では他のアジア諸国にも後れを取るシーンが増えてきたのは誰もが知るところと思います。何故そのようなことになってしまったのか、様々な要因が考えられるとは思いますが、私は大学院教育の影響も大きいのではないかと、特に大学院教育の改革が今後の我が国の大きな課題となるのではないかと思い、自らの体験も踏まえ、僭越ながらご提言申し上げたく、今回筆を取らせていただきました。

1. 「日本の大学院の問題と課題」

■日本の大学院の問題

数年前に東大が国際化を図ろうと、英語で授業を行うことにし、秋入学を始めようとして、インド数学で有名なインドに行って留学生を募集しようとしたことがあります。奨学金を出す事にしていたのですが、受験者はいたかもしれませんが入学者はゼロだったそうです。インド人の日本の大学院に対する評価は低く、東大でも国際基準から見るとレベルが低いとバカにされていたため、アメリカやイギリスの大学院に行った方が良いという理由です。

急激な経済成長を遂げ IT 業界に多数の優秀な人材を輩出しているインドは、いまだカースト制度が根強く影響を与えているのですが、カースト制度による差別を乗り越え、IT 産業での成功を勝ち取るため、若者たちは熾烈な大学受験競争を繰り広げています。中でもインド国内最高峰のインド工科大学は、競争率は 100 倍超で世界でも有数の難関校とも言われています。卒業後は世界各国の IT 企業から引く手数多である彼らが大学院に進学する際、選ぶのはインド工科大学が設立の際モデルとした MIT をはじめとするアメリカの有名一流大学院な

のです。

日本のある国会議員は日本で博士を取っても気の毒と発言されていました。年齢が高くなってしまい、良い就職先がなかなかないことからのようですが、実際に日本の大学院で博士号を取得しても、日本では十分な学力がなく企業等からはあまり評価されず、就職先が無く生活不安な非常勤講師になるしかないのが現実です。私の学校でも日本では一流と言われている東大、京大や早稲田大の大学院で博士課程満期退学まで修了した教員を採用したことがあります。最初は講師で雇い、研究業績が不足していたため、准教授になれるように研究し、著書を執筆するようにアドバイスしたのですが、原稿を見てみると全く文章がなっていない。早稲田で博士課程まで修了した教員の文章とは思えないものであったため、本人に話を聞いてみると大学院は屯しているだけで、ゼミをやっているだけで単位が取得できるので、楽で全く学力がつかないと話していました。

■なぜ日本の大学院は評価されないのか。

日本の大学院を出ても読み書きの学問的学力が伸びず、専門性もつかないことの原因の一つは日本では大学を出てすぐに修士課程に入り、修士を取得した後すぐに博士課程に入ることも影響していると思われれます。アメリカの大学院では学士を取得した後、原則として3年以上の実務経験がないと修士課程には入れませんし、修士を取得した後も、原則としてさらに高い実務経験がないと博士課程に入ることは出来ません。実務経験が重視されるのです。大学は実務経験のない学生は研究への問題意識がなく、熱意が低く、研究課題がなく、途中で退学してしまったりすることを知っているからです。逆に実務経験のある学生は自分の経験から来る問題を解くために大学院に入学するため、熱心に研究し、厳しい指導にも耐え、学位を取得していきます。

更にアメリカでは同じ大学の大学院には原則として進学できません。大学院でも修士を取得した後は、別の大学の大学院博士課程に進むよう勧められます。同じ大学にいと教員と馴れ合いになってしまう事、同じ先生についていると、その先生の指導の範囲でしか学ぶことが無く、視野が狭くなり、柔軟な思考が出来なくなってしまう事がその理由です。私は日本で専門学校を経営している経験があったため、フォーダム大学の大学院に入学が許可されました。博士課程は隣のコロンビア大学等の他大学に進むように勧められましたが、外国人であり、できれば慣れた環境で学びたいとお願いしたところ、特別に入学が許可されました。その代わり最初は仮入学という形で博士課程に入り、博士課程の科目3科目を履修し、その全てでA評価を取らなければならないという、厳しい課題が課せられました。その課題をクリアしたことで私はようやく、フォーダム大学の大学院の博士課程に正規入学することができたのです。

日本の大学院が科目履修もなく、学生を鍛えて学力を伸ばす体制になっていないことや、学士も修士も博士も同じ大学で取得できるのは、ヨーロッパの大学院を真似たことが原因と言われていています。ヨーロッパの大学院は入学してから科目履修もなく、指導教授から博士論文を書き上げたら持ってくるように言われ、博士論文が書きあがるまで殆ど指導教授と会うこともありません。私が博士号を取得したフォーダム大学にもヨーロッパで博士号を取得した教授がいましたが、その教授もヨーロッパで博士を取得するのはアメリカに比べると簡単とも話していました。

実は私も大分以前にヨーロッパで博士を取得した教員を雇ったことがありますが、博士を取得しただけあって意思は強いのですが、頑固過ぎて融通が利かず、あまり仕事が出来なかったので、しばらくしてお辞めいただいたことがあります。ヨーロッパの大学院では日本と同じように一人の教授に付いて、その教授の指導通りに研究し、論文を書き上げれば修士や博士が取得できるため、どうしても一つの考え方に凝り固まってしまい、ともすれば頑固になってしまうようです。やはり、アメリカの大学院のように何人かの指導教授が付いたり、別の大学院に進学することで、それぞれ違った角度から指導を受け、柔軟な思考力が身に付いていくのだと、その時感じたものです。

アメリカの大学院で博士を取得すると、社会から評価され、国の機関や大企業、あるいは国連などの国際機関で活躍しています。最近ではアメリカ大統領もアメリカの大学院出身者が多くなっています。ビル・クリントン氏はイエール大学のロースクール（法科大学院）出身で法務博士を取得していますし、ジョージ・W・ブッシュ氏はハーバード大学のMBA。バラク・オバマ氏はハーバード大学のロースクール卒業。ジョー・バイデン氏はシラキューズ大学のロースクール出身で法務博士。大統領にはなっていませんが、ヒラリー・クリントン氏もイエール大学のロースクール出身で法務博士を取得しています。

日本人で初めて国連難民高等弁務官になられた緒方貞子氏もアメリカのカリフォルニア大学バークレー校で政治学博士を取得されています。

2. アメリカの大学院の教育（自らの実体験から）

■留学前夜

30年以上前、まだ本校が専門学校を創設し、大学ではなかった時代に36歳の頃アメリカで教育学の博士号を取得しようと、留学を思い立ちました。

私が進学先に選んだのは1841年に設立され170年以上の伝統のあるカトリックイエズス会系名門大学のフォーダム大学です。（日本では上智大学がカトリック

クイエズス会系の大学として知られています。) フォードム大学の教育学大学院からはアメリカの大学の学長が数多く出ていますし、イエズス会の社会的弱者優先という方針も社会福祉の学校を経営する私に合っているのではないかと感じたこともあったかもしれません。

そこで、6月に来日していたフォードム大学のテッド・ワイゼンソー教授を捕まえ、宿泊していた新宿の京王プラザホテルの宿泊費が高かったので、サンシャイン60のプリンスホテルを紹介し、私が持っていた割引券も使ったおかげで安くなり、御本人は大満足しました。

その際、当時の私の専門学校の非常勤であり、仲間でもあった「百万人の英語」の荒井良雄先生(学習院大学)や上智大の秋山教授が私をフォードムの大学院に入学させて欲しいと頼んだのですが、なかなか良い返事がもらえませんでした。そこで、その翌日に、サンシャイン60の59階のレストランで1対1で私が話をしたところ、ようやく協力しようと首を縦に振ってくれたのです。

カリフォルニアで夏期研修があるから、そこに出向いて、その後ニューヨークにあるフォードム大学に行くという手はずで、その旨は事前に当時のチェアマン(学科長)だったジョン・ポウスター(博士)に話してありました。ポウスターの話では夏に3~4回行けば「修士」が取れるということでしたが、私はできれば秋からフルタイムの留学生として始めたいと考え、その方向で手続きをし、英語の試験もパスしました。その時に協力してくれたのが、前に日本に来た元ニューヨーク州の学区の教育長だったテッド・ワイゼンソー博士でした。彼はユダヤ系で、9月に行った時選択する科目を親切にもアドバイスしてくれたりもしました。フォードムの大学院には現職の教育長と教育長の経験者も何人かいて、権威のある学校であることがそこからもわかります。

■修士から博士号取得まで

9月から修士課程がスタートしたのですが、仲の良かったハーバード出身のセーラ・ユラー博士やワイゼンソー博士は“A”をくれるのですが、その科目ばかりというわけにもいかないのです。秋に4科目、春に4科目、夏に2科目を履修し、1年間に10科目で、修士課程を終了しました。ところが、その時点で、チェアマンのジョン・ポウスター氏が突然フォードムを辞めてよその大学に行ってしまったのです。米国ではその仕事を辞めることになった場合、おいそれと他人には言いません。言えば、誰も相手にしてくれなくなってしまう。しかも影響もなくなります。ですから彼の退任は事前に知らされることはありませんでした。修士課程を終わらせ、博士課程に入ろうとしていた私にとっては急にいなくなられ、ポウスター教授と約束していた必要な第二外国語を日本語にすることも認められなくなり、Ph. D. から第2外国語のいらぬ Ed. D. (Doctor of

Education 教育学博士)へコース変更をさせられる事になったのは、まさに青天の霹靂でした。後に彼はミシガン大学の教育学のディーン(学長)になりました。

米国では新しいトップがやって来ると、多くの場合、前任者のやってきたことは全面的に否定される傾向があります。新しいチェアマンはアイルランド系のトーマス・モルキーノ博士で、彼は前任者を全面的に否定し、なんと私が取得した修士課程の資格はけしからんと言い出したのです。新チェアマンが自分の力を誇示するために、私が標的になったのです。前任者が認めた単位を否定し、あと9科目を履修しろと言いだしたのです。冗談じゃない。それではもう一度修士を取り直せと言っているのと同じではないかと大喧嘩をして食い下がり、2科目は減らしてもらいましたが、結果的にさらに7科目を履修させられる羽目になったのです。科目履修は合計 修士課程 10+7 +博士課程 15=合計 32 科目になりました。それに加え余分に1~2年かかると言われている通学セミナー、博士論文作成準備試験、博士論文セミナーというハードルがあります。大きすぎる負担です。

そう言えば、ワイゼンソー博士の子息がフォーダムの博士課程に入り、同じユダヤ系の先生がその博士論文の主査になったのですが、何回もダメ出しをして修正をさせるものだから、とうとうワイゼンソー博士はカンカンに怒り、辞表を叩きつけてフォーダムの教授を辞めてしまったという後日談も残っています。ところが、最終的に出来上がった論文は素晴らしく、同じ教授仲間の子息の博士論文でも手心は加えず、厳しく向き合うということなのです。米国における「博士号」の重みは大変なものだということですね。

ちなみに、私の博士論文の主査だったアンソニー・バラッタ氏は、奥さんの姪の博士論文の主査になるように頼まれたが断ったといいます。結局その学生は14年かかって博士号を取得したそうです。博士号というのは、それほどまでに重みのあるものなのです。

私は、最終的にやっとの事でフォーダムで博士課程を終了し、博士号を取得しました。

3. 中国や韓国、台湾等の躍進と大学院教育

■中国人留学生の悲哀

フォーダムの修士課程で、同級生到北京師範大学出身の中国人の女性がいました。中国ではエリートです。その彼女は、「米国の学生は馬鹿ばかりだ。勉強ができない」と平然と言っていました。ちなみに、彼女の夫は中国で資格を

取った弁護士であり、ニューヨークのコロンビア大学に来ていました。米国の司法試験もクリアし、米国での弁護士資格も取得していましたから、夫婦揃ってエリートですね。

ところがその弁護士の旦那が香港から来た若い女性に走り、彼女は1銭も貰えずに捨てられてしまったのです。その後、アルバイトをしながら苦勞して博士課程まで行ったのですが、そこで博士論文を書く際に、他人の論文を引用したと明記すればよいのに、そこを明確にしなかったのか、盗作をしたと咎められ、退学処分になりかかったそうです。

日本の場合、博士論文に盗作があっても、ほとんど教師は気がつかずに終わってしまうことになります。なぜかというと、主査を務める先生方がきちんと十分な勉強をしていないからです。米国の教授たちはものすごく勉強をしていますから、すぐにバレてしまうのです。

彼女の場合は、ほとんど退学になるところでしたがお情けでそれだけは免れ、最終的にはユダヤ系の米国人の作家と再婚したそうです。そして、その旦那に手伝ってもらって博士論文を仕上げ、最終的に博士号を取得したそうです。

このことで申し上げたいのは、中国における教育では四書五経等の官吏登用の伝統による暗記力が大切で、修士課程までは米国の大学でも暗記力が大切なのですが、博士課程になると暗記力ではなく創造力が大切になるということなのです。修士課程で米国の学生たちを馬鹿にした彼女は、そのことに気づかなかったのでしょうかね。

■米国籍を取得したい

一緒に学んでいたポーランド人の留学生は、英語以外に4ヶ国語も堪能な優秀な女性で、フォーダムでは教授の助手などをしていたのですが、彼女も博士号を取得するのに大変な苦勞をして私より3年ほど遅れました。

当時はまだポーランドは共産圏であり、米国への留学自体が大変な時代でした。アルバイトや助手をしながら勉強していたのですが、彼女は最終的に米国の国籍が欲しかったのですね。

そこで、フォーダムで博士号を取った後、彼女は米軍に入隊したのです。博士号を持っていると、入隊と同時に将校になれ、前線にも行かずに済み、高給で楽ができたのですね。そのまましばらく軍隊にいれば、除隊をすると同時に米国に尽くしたその功績が認められ米国籍が取得しやすくなるのです。そういえば、あのキッシンジャーも元来はドイツ籍のユダヤ人だったのです。外国人だった彼がハーバードに行き、政治学の博士号を取得して、それから米国籍を取得したのです。

■中国大発展の秘密

私がハーバードに来てわかったのは、日本からの留学生はほぼ30人、学士課程や、修士課程ばかりということでした。私と同じ頃にいた中国人留学生は修士や博士課程に300人ほどでしたが、彼らは口を揃えて「天安門事件の後で、中国には戻りたくない」と言っていました。

米国では「博士」を取らないと専門家にはなれませんし、高給はとれません。米国で生きていくために、中国人留学生は必死で「博士号」を取っていたのです。そもそも中国でトップクラスの学生が来て、必死になって勉強しているのです。そして、彼らは米国で勉強し、米国で就職し、骨を埋める覚悟をもっていました。

ところが、少し情勢が良くなったせいもあり、中国政府が米国の会社よりも良い給料を出すからと呼び戻しにかかりました。なんと家屋敷まで用意するという歓待ぶりです。そうして数多くの中国人の「米国の博士」たちが米国から中国に戻りました。その後中国の急激な大発展の礎となったのです。中国が、経済力、軍事力、そして宇宙科学まで、発展を遂げお金持ちになり、GNP世界2位にもなり、豊かにもなったのはご存知の通りです。

余談ですが、日本の優秀な研究者は、研究費が潤沢に提供されない日本を捨てて米国に渡りました。今では優秀な人材が定年を迎え、いまやその渡航先が中国や韓国、台湾等になっているのです。その成果の象徴がファーウェイやサムスン、鴻海の大成功だとも言えるでしょう。

■韓国と台湾の躍進

韓国は朝鮮戦争があり、身の危険を感じた移民や留学生は、ベトナム戦争の時に兵隊が米国側で戦い、優秀な戦果を挙げています。その見返りという意味で、当時米国は韓国人移民や留学生を大量に受け入れていました。米国の大都市にはコリアンタウンも多くできました。その韓国人たちも、米国では「博士号」を取らないと生きていけないことを知っていました。そうした「博士号」を取得した韓国人たちが、現在の韓国のサムスンの基盤を作ったのです。

さらに韓国の企業は日本の一流メーカーを定年退職した研究者を高額の給料でスカウトしました。そうやって日本から流出した技術が韓国の白物家電の市場拡大の基盤となっているのです。

一方、台湾は、いつ中国共産党に侵略されるかわからないという危機感から、米国に行く留学生たちは必死になって勉強をしています。もちろん、彼らも「博士号」を取得し、帰国後母国の発展に大いに寄与しています。それがTSMCという世界第3位(2021年)の半導体メーカーの基盤となったのです。ちなみに、半導体生産の世界第1位は韓国で、2位は台湾、米国に留学した博士たちの功績はとても大きいと思います。だからバイデン米国大統領はまず韓国(サムスンの

工場)に行ったのでしょね。

■ バブル期の日本人留学生

かつてバブル時代に多くの日本人が米国に留学しました。ところが彼らが目指したのはせいぜい修士課程です。残念ながら、その時代に必死になって博士号を取ったのは中国人と韓国人、そして台湾人やインド人の留学生たちだったのです。ハーバードの日本人留学生 30 人中博士課程は 1~2 人程度で中国人の 300 人とは大違いでした。その頃日本の景気が良かったので、本気で努力しませんでした。

私に意地悪をした学長のトーマス・モルキーノ博士に、日本に招待するからうちの日本人の生徒にレクチャーをしてくれないかと誘ったのですが、私が博士号を取得するまでは金輪際行かないと言うのですね。そんなことをしたら不正をしたと思われるのが嫌だということです。私が博士号を取ってから、1 度来てくれました。もちろん、約束通り盛大に接待し、大喜びでしたが、数年後に心臓発作で亡くなってしまいました。

うちの大学にも東大卒、京大卒がいて、大学に入学した頃はエリートだったと思いますが、修士、博士課程に進むにつれて、学力がアメリカのように伸びなくなっていました。日本の大学院はゼミ等に参加していれば科目履修もないようで、基本的な学問的読み書きの訓練が全くなされない。レポートも教師が採点したり、書き直しをアメリカのようにさせたりしないようなので、読み書きの学力がつかないそうです。ですから博士を日本で取得しても、学力が十分になく、すでに歳をとっており、就職先がないようなので、日本の大学院に入学してくる学生は少ないそうです。

4. 今後の大学院教育のあり方

■ ヨーロッパ式からアメリカ式の教育方法への転換

以上述べてきましたように米国における「博士号」というのは厳正で重みのあるものなのです。日本の博士課程は構造的な欠陥があり、これをアメリカ式にすぐに直すことはほとんど不可能だと思いますが、少しずつでも改善していくことが今の日本には必要と考えます。私の考えでは以下のプロセスで改革を進めていくことが必要と考えます。

はじめに実施すべきこととしては

- ① 原則として同じ大学で学士、修士、博士を取得できなくする。

- ② 原則として実務経験があることを入学資格とする。
- ③ 指導教授は複数名とする。
- ④ 科目履修(コースワーク)を取り入れる。(形骸でなく、実質を伴うもの)
- ⑤ 大学教員の指導責任の明確化

アメリカのようにコースワークを必須とし、同じ大学で、学位を取れないようにし、複数の指導教授から指導を受けるようにする。そして、実務経験のあることを原則とする。そして、恥ずかしながら私の大学の大学院でも昨年までそうでしたが、指導教授が全く指導していないで、多くの学生が博士を取得できずに満期退学していつている現実を改めるため、指導教授の責任を明確化することです。入学試験をクリアし、一定の学力を持っていると評価され入学してきた学生たちの多くが博士を取得できないのは、学生ばかりの責任ではなく、指導する側にも責任があると思います。

実際に本学で何年も博士課程に在籍しても博士が取れない学生に聞いてみると、指導教授から全く指導を受けていないという声も聞こえてきました。昨年、そうした学生を私がアメリカ式できっちり指導したところ、指導を受けた学生は今春全員博士を取得し、卒業していきました。そして学生も実務経験のある学生を入学させるようにすれば、彼らは現実の社会での問題を知り、それを大学院で研究することで解決しようとする訳ですから、熱心に研究し、厳しい指導にも付いてきます。

こうするだけでも、まずは一定の読み書きの学力や、思考の柔軟性が鍛えられると考えられます。効果が出れば、日本国内の企業の採用姿勢に変化が生じてくるものと考えられ、日本の大学院の評価にも変化が生じてくるはずです。もちろん国際化の時代であり、外国人にも評価される大学院にしていく必要はありますが、先を急いでも東大の例のように上手くいかなくなってしまいます。日本の企業が日本人の大学院生を採用しようとならないのに、外国人に評価されるはずがありません。まずは日本人の大学院生に対する社会的な評価を上げるところから始めるしかないのです。

次の段階として

- ⑥ 英語での履修と論文作成
- ⑦ 9月入学の導入
- ⑧ 教員の国際化

日本人の大学院生に対する評価が上昇し、企業等での採用が活発になれば当然海外の学生たちの日本の大学院への関心も高まってきますので、国際公用語である英語で学べる環境を整えるのです。そして教員も日本人の教授ばかりでなく、海外にも視野を広げ優秀な人材を海外から呼び寄せるのです。さ

らに世界でも多くの国で導入されている 9 月入学の導入です。こうしていけば日本の大学院で学びたい外国人も自然と増えていき、国際的な評価も高まっていくでしょう。「言うは易く行うは難し。」一朝一夕にできることではないことは私も十分に分かっているつもりです。

5. 最後に

日本の企業も評価せず、日本人も積極的に入学しようとしなない（文系の場合ですが）大学院に外国人を呼ぼうとしても上手くいかないのは当然です。まずは日本人の誰もがチャンスがあれば入学し、研究したい、学びたいと思う魅力ある大学院にすることが先決なのだと私は思います。

大学院を改革し、アメリカの名門大学院のような評価を受けるのはほぼ不可能なのではないかと私も思いますが、何も行動を起こさなければ何も変わることはありません。「千里の道も一歩から」、「教育は国家 100 年の大計である」と言われているように、アメリカで名門といわれる大学院は 100 年以上の長い年月をかけ、現在の社会的評価を確立させてきたのです。

日本の将来のためには少しでも早く行動を起こすことが肝要ではないかと思ひ執筆を思い立ちました。拙文ではございますが、ご参考にしていただければ幸いです。

【了】